ULTRAMAN MASK
立体化の軌跡

原作・作画 **清水栄一**（Eiichi Shimizu）×**下口智裕**（Tomohiro Shimoguchi）

最初に、ある程度のマスクの形が出た時点で見せて頂いたのですが、その時点で全く問題が無く、原型が出来上がったときもボクと下口は「すげーすげー」とバカみたいに同じ言葉を繰り返してるだけでした（笑）。

こちらからは指示らしい指示はしておらず、設定画をお渡しして、後はお任せです。なので当然リテイクもありませんでした。むしろ山岸さんの方から「ここがこのラインだと、ここの面はこういう処理になるんですけどそれでいいですか？」と聞かれて、こちらは「はい、仰る通りです。」といった感じでした（笑）。

いよいよマスクの原型が上がるぐらいのタイミングで、山岸さんから「台座ってどうします？」と聞かれて、「マスクを置けるだけの簡単なモノで十分ですけど、何なら台座がなくても特に問題ないですよ」といったんです。ただ、劇中でマスクのメンテ等に使う専用の台座が存在してるので「一応、そういうモノは出てきますけど…」とお伝えしたところ即座に「その設定画ってありますか？」と。それから数日後、送られて来た画像には、その台座にマスクが置かれていました。この「設定があるなら造らなきゃダメでしょ」的な山岸さんの心意気に改めて惚れ直しました（笑）。

きっと当初は山岸さんも形状把握が出来る程度の簡単なモノを想定していたかと思いますが、やり取りをしている内に、出来上がってみたら台座までしっかり造られた、製品としていつでも出せるレベルの素晴らしいモノになりました。何だか申し訳ない気持ちではありますが、それ以上に嬉しさが勝っているので、ボクら的には大満足でございます。

原型製作 **山岸幸司**（Koji Yamagishi）

ヒーローズ読者の皆さん初めまして。今回、ウルトラマンマスク作画参考用モデルの造形を担当させて頂いた原型師の山岸と申します。今回のきっかけはキューズQというメーカーで『鉄のラインバレル』のメカをガレージキット化する際に原型監修で清水さん、下口さんにお世話になったときに「お礼に何か新デザインの参考モデルみたいなモノを作りましょうか？」という会話をしたことでした。

その何気ない雑談も忘れかけていた『ULTRAMAN』連載開始目前の某日、清水さんから「ウルトラマンマスクの作画参考モデルをお願いできないでしょうか？」とのご依頼。私の勝手な想像でラフなクレイモデルが頭に浮かび、二つ返事でお引き受けした所、予想を遥かに上回る緻密で超カッコいい設定画が送られてきました。原型師としましては、これを完全再現せずにどうする！ と一気にテンションが上がりました。

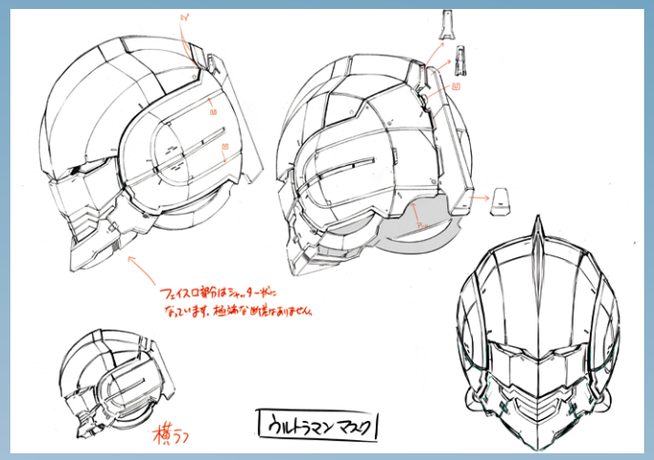
造形作業を振り返りますと、デザインの解釈自体に悩む事はありませんでしたが、設定画を最大限に尊重しつつウルトラマンの強くて優しいキャラクターを表現したいと考えて、正面から見た時の目の大きさ（面積）には細心の注意を払いました。また、頭頂部から庇（ひさし）に向かうカーブやセンターから側面に繋がる曲面の撓（たわ）ませ具合はライティングの角度を変えながら確認して微調整を繰り返しました。 塗装に関しましては、清水さんから頂いたカラーリング資料及びカラーレシピを再現致しました。

■プロフィール *profile* '89 年フリーの原型師としてデビュー。以後、メカニック系の商品原型製作を中心に活動。思い出したように模型誌のライターや立体物系のイベントに参加することも。

■代表作　1／100　ヴァーダント（鉄のラインバレル）
　　1／100　皇帝騎　ジ・エンプレス（ファイブスター物語）
　　1／100　エートール・SWANS（ファイブスター物語）

ULTRAMAN MASK SUPPLEMENT 設定画

早田進次郎が着用するマスクの設定画。三面図になっており、口の部分はシャッター状になっている、後頭部のパーツは頭部パーツと分かれているなど、細かい指示が書き込まれている。

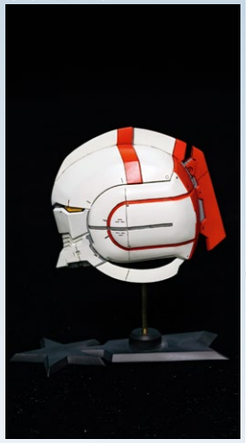


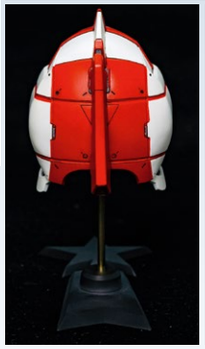
ULTRAMAN MASK MODEL 原型（彩色前）

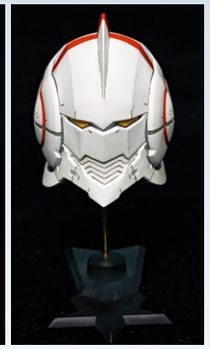
原型師の山岸幸司が作成したモデル。すべてをアナログの手作業で作成したとは思えぬほどの精密なつくり。陰影によって表情があるように見える顔つきなどが、細部まで彫り込まれている。

ULTRAMAN MASK MODEL,PAINTED 原型（彩色後）

原作の色指定に基づき、フィギュアを彩色。全体に真っ白く塗られた中に、鮮やかな赤色が効いている。初代マンを彷彿とさせる印象的な色づき。







台座＋マスク　劇中に登場するマスクメンテナンス用の台座を再現したもの。科学特捜隊のマークも入っている。今月号掲載の第10話本編にも登場。

ULTRAMAN MASK
立体の衝撃（リアル）

清水栄一×下口智裕×山岸幸司

触感、質感、重量感。
ディティールに込められた立体物のリアル！
ウルトラマンスーツのマスクが
作画参考モデルとして制作された。
著者と原型師が直接やりとりし、
細部まで作り込まれた本物がここにある。

立体物が広げていく『ULTRAMAN』の世界

二次元から三次元へ。コミックからフィギュアへ。『ULTRAMAN ウルトラマン』は進化する。

1966年に放送された初代『ウルトラマン』は、空想特撮シリーズと呼ばれる特殊撮影技術を駆使した実写作品だった。

ミニチュアで製作されたセットの中で、ウルトラマンのスーツを着た俳優（アクター）が怪獣と戦う。その姿は立体的で肉感的。光の巨人が実在するリアリティを、映像というメディアを介して、視聴者へ伝えたのである。

『ウルトラマン』は放送後、大きな反響を呼び、様々な領域へと広く展開していく。漫画や小説なども次々と作られ、三次元（立体）から二次元（紙）へ広がっていった。

それから約46年。初代『ウルトラマン』の遺伝子を継いだ物語、コミック『ULTRAMAN ウルトラマン』が次のステップへ踏み出す。著者の清水栄一氏と下口智裕氏のリクエストにより、ウルトラマンスーツのマスクを立体化。作画参考モデルとして制作が行われたのだ。原型を担当したのは清水・下口両氏とも交流のある山岸幸司氏。緻密に描きこまれた設定画をもとに、細部の形状まで的確に作りこまれたマスクが出来あがったのである。

立体化するということ――今度は、また新たな形で二次元（紙）から三次元（立体）へ進化するということ。それは、コミック『ULTRAMAN ウルトラマン』から初代『ウルトラマン』へ捧げるリスペクトでもある。はたして立体マスクの次は何が…？　今後の展開は乞うご期待!?